

# 男性が妊娠の当事者になるとき

——男性不妊治療の専門医と男性当事者へのインタビュー調査から——

岡山大学 齋藤圭介

## 1 目的

この報告の目的は、女性の問題として論じられがちな妊娠を、男性の問題と捉えなおしたときに生じる問題を整理し、男性にとっての妊娠経験を明らかにするものである。

妊娠について、女性当事者の語りを分析した先行研究は多い。他方、妊娠をした妻の傍らにいたであろう多くの夫たちについては議論の空白状態が長いこと続いている。しかし、生殖補助医療技術の展開と男性不妊の議論の盛り上がりは、男性に自分の精子の量と質が十分であるのかという問いを突き付けることになった。つまり、男性の〈生殖能力の可視化〉という事態が生じており、こうした事態は、男性もまた生殖の当事者の一人であると自覚する契機となっている。

生殖補助医療技術の展開に伴い、妊娠における男性の役割はいままでよりも大きくなってきていることが明らかとなっているが、依然として男性不妊治療の専門医と当事者の男性たちがどのような意識でこの事態に対処しているかは十分に明らかにされていない。そこで、インタビュー調査を通して専門医・当事者の意識を明らかにし、男性にとっての妊娠経験を考察する。

## 2 方法

本報告で分析するデータは、2017年9月から2017年12月にかけて東京都内を中心に行った男性不妊の専門医3名と生殖補助医療を用いた／用いることを検討した男性当事者6名の半構造化インタビューによって得られたものである。得られたデータは、MAX-QDAを用いて分析した。

## 3 結果

分析の結果、以下の3点が明らかになった。(1) 男性の生殖プレッシャーの変化——生殖に取り組む男性の主体性の変化——が生じていること。(2) 男性が不妊治療に臨む動機の1つには妻の痛みを分かち合おうという不妊治療に臨む男性特有のメンタリティがあること。たとえば男性が強い痛みを感じるTESE(精巣内精子採取術)をめぐる語りから、不妊である男性は、自身の不甲斐なさや、妻が身体を酷使して不妊治療に取り組んでくれていることへの負い目があり、男性も自身の身体に負担をかけることでその負い目を軽減させたいという動機が垣間見れた。

(3) 男性不妊についての治療は、無精子症か否かではっきりと治療区分が分かれている。女性と比較すると、不妊治療のやめどきのジェンダー差が大きいことがわかった。

## 4 結果

以上から、生殖補助医療技術の展開に伴う男性の〈生殖能力の可視化〉が進むことで、男性にとって不妊という経験が、生殖における当事者意識を高める契機になることが明らかになった。

これまでの先行研究における女性の語りからは、男性が生殖に真剣に取り組んでいない(当事者としての自覚が少ない)ということが論じられてきた。しかし、晩婚化や晩産化の影響もあり、不妊の原因は男性にもあることが周知され男性自身にとっても不妊治療がこれまでよりも身近になることで、男性の生殖への意識は変化してきている。医療技術によって男性自身の生殖能力やその量や質が可視化されることで、男性もまた女性と同じように生殖の当事者であることを直視しなくてはならない場面が増えたといえるだろう。

\*本報告は共同研究(共同研究者:菅野摂子氏・柘植あづみ氏・田中俊之氏)の成果の1つである。また、JSPS 挑戦的萌芽研究「男性の生殖論に向けて——出生前検査における男性の経験に関する調査」(16K13410)(研究代表:菅野摂子)の助成による成果の一部である。